THE FUKUOKA
ASIAN CULTURAL PRIZES

第9回
福岡アジア文化賞

THE 9th
FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES

1998

大　　賞
GRAND PRIZE

李基文（イ キ ムン）	LEE Ki-Moon
ソウル大学校名誉教授	Professor Emeritus of Seoul National University
1930年10月23日生	Born October 23, 1930
大韓民国	The Republic of Korea

ワシントン大学で、ニコラス・ポッペ先生（左）と
Standing with Professor Nicholas Poppe, a leading authority in the Altaic and Mongolian linguistics (left) at Washington University

韓国政府の文化勲章受勲を祝う会で、夫人と（1990年）
Professor Lee with his wife at the celebration of the Order of Culture by the Korean Government in 1990

比叡山延暦寺の叡山文庫で、藤本幸夫教授（右）と
Professor Lee and Professor Fujimoto Yukio (right) at Eizan Library of Enryakuji Temple in Mt. Hiei

ソウル大学校校庭で、恩師李崇寧先生（右）と服部四郎先生（中央）
Professor Lee at Seoul University campus with his mentor

東京大学文学部評価委員会で（中央）
At the Review Committee of Faculty of Letters, Tokyo University (center)

略　歴

1930	平安北道定州郡に生まれる
1953	ソウル大学校文理科大学国語国文学科卒業
1959-61	高麗大学校文理科大学助教授
1960-61	ハーバード大学客員研究員
1962-96	ソウル大学校文理科大学専任講師、助教授、副教授、教授（1975年にソウル大学校人文大学に改組）
1965-67	ワシントン大学客員副教授
1973	ソウル大学校文学博士
1974	日本学術振興会客員教授
1975-78	ソウル大学校東亜文化研究所所長
1977	アメリカ言語学会言語学講座客員教授
1978-80	韓国言語学会会長
1980-81	コロンビア大学先任研究員
1981-85	ソウル大学校韓国文化研究所所長
1982-	韓国学術院会員
1985	三・一文化賞受賞
1985-87	ソウル大学校中央図書館長
1988-90	国語学会会長
1990-98	韓国アルタイ学会会長
1993	韓国学術院賞受賞
1993-94	東京大学文学部客員教授
1996-	ソウル大学校名誉教授

主な著作

『国語史概説』民衆書館，ソウル，1961

『国語史概説　改訂版』民衆書館，ソウル，1972（藤本幸夫訳『韓国語の歴史』大修館書店，東京，1975）(B. Lewin訳 "Geschichte der Koreanischen Sprachen" Ludwing Reihert Verlag, Wiesbaden, 1977)

「日本語起源論」〈英文〉（『朝鮮学報』27）朝鮮学会，奈良，1963

「高句麗の言語とその特徴」（『白山学報』4）白山学会，ソウル，1968
(中村完訳『論集日本文化の起源5』池田次郎・大野晋編，平凡社，東京，1973)

『訓蒙字会研究』ソウル大学校韓国文化研究所，ソウル，1971

『国語音韻史研究』ソウル大学校韓国文化研究所，ソウル，1972

「韓国語とアルタイ諸語の比較研究」〈英文〉（『光復30周年紀念総合学術会議論文集』）韓国学術院，ソウル，1975

「日本語比較研究の方法について」(馬渕和夫編『日本語の起源』）武蔵野書院，東京，1986

『国語語彙史研究』東亜出版社，ソウル，1991

『韓国言語地図集』（共著），韓国学術院，ソウル，1993

「三国史記に見える地名の解釈」（『朝鮮文化研究』2）東京大学文学部朝鮮文化研究室，東京，1995

贈賞理由

李基文氏は、韓国語研究の国際的な権威である。

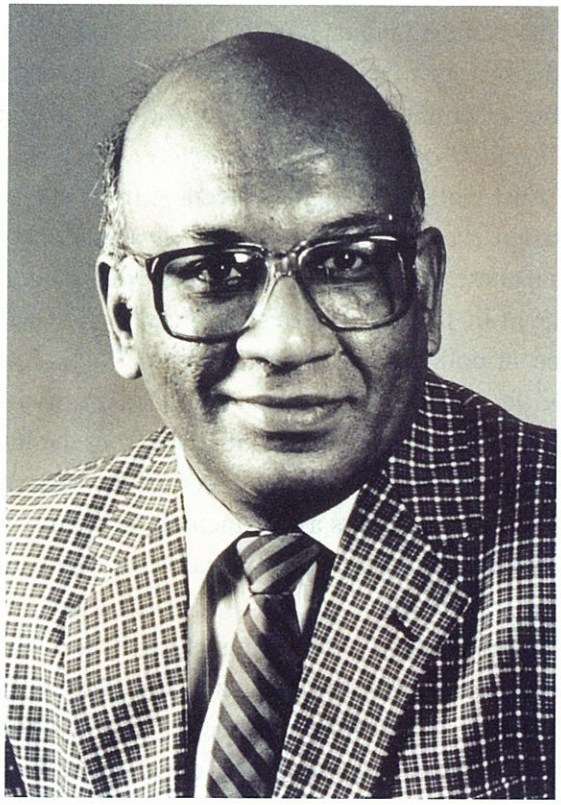
1953年ソウル大学校国文科を卒業した同氏は、1996年２月に定年退職するまでソウル大学校において研究と後進の育成に当たった。その一方で、韓国言語学会、国語学会等の会長を歴任し、普遍的な言語学理論に立脚した韓国語研究を確立して国際水準にまで高めるとともに、韓国語の個別言語としての個々の言語事象の解明を通して一般言語学理論の構築に大きな貢献をした。国内外にその教えを受けた研究者は多数にのぼり、日本の韓国語研究者のほとんども同氏の薫陶を受けている。その間、国語研究所長を兼任して表記法制定等、語文政策の確立に尽力し、また学術院会員として学術の振興に努めるとともに国際学士院連合が計画し推進した世界諸言語圏の言語地図作成プロジェクトに韓国を代表して参画し、その一環として『韓国言語地図集』の作成に力をつくした。また、ハーバード大学をはじめとする海外諸大学の客員教授として国際学術交流にも貢献し、1993年東京大学文学部文化交流研究施設に新設された朝鮮文化研究部門に初代客員教授として招かれ、１年間研究・教育の任に当たって、日韓学術交流に新たな道を開いた。

李基文氏は、韓国語を中心に東アジアの諸言語について、さまざまな角度からの解明に努め、明晰で透徹した分析に基づく数多くの研究論文・著書を発表し、研究の進展に多大な貢献をした。韓国語の歴史的研究としては、中世語に関する研究を中心に据えた上で、韓国語の成立から現代に至る韓国語史の諸課題について精密な研究を行い、『国語音韻史研究』『国語語彙史研究』『韓国語形成史』等の数多くの論著を著した。なかでも『国語史概説』は韓国語史の周到で具体的な記述として国際的にきわめて評価が高く、我が国で藤本幸夫氏により『韓国語の歴史』として翻訳・刊行された他、B.レービン教授によるドイツ語訳があり、現在、同氏は最新の知見を盛り込んだ英語版をS.R.ラムジー教授の協力を得て作成中とのことであり、諸外国での一層の評価の高まりが予想される。また、韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較言語学的研究を試み、『三国史記』の地名表記の分析により高句麗語の特徴を解明し、これを比較研究の重要な要として位置づけ、日本語を含む東アジア諸言語の系統論研究に新しい視点を導入してその解明に貢献するとともに、比較言語学の方法論に対してアジアの言語研究者の立場から新たな知見を提供して東アジア諸言語の系統論研究を大きく発展させた。

このように、李基文氏の韓国語研究と韓国語・日本語・アルタイ諸語の比較研究は、一般言語学・史的言語学・比較言語学の進展に多大の貢献をしたばかりでなく、アジアの文化とその研究の意義を広く世界に示し、世界の言語学界の中で東アジアを代表する研究者であるという高い評価を得たものであり、まさしく「福岡アジア文化賞―大賞」にふさわしい業績である。

学術研究賞・国際部門
ACADEMIC PRIZE ： INTERNATIONAL

スタンレー・ジェヤラジャ・タンバイア	**Stanley Jeyaraja TAMBIAH**
ハーバード大学教授	**Esther and Sidney Rabb Professor of Anthropology, Harvard University**
1929年1月16日生	**Born January 16, 1929**
アメリカ合衆国	**The United States of America**

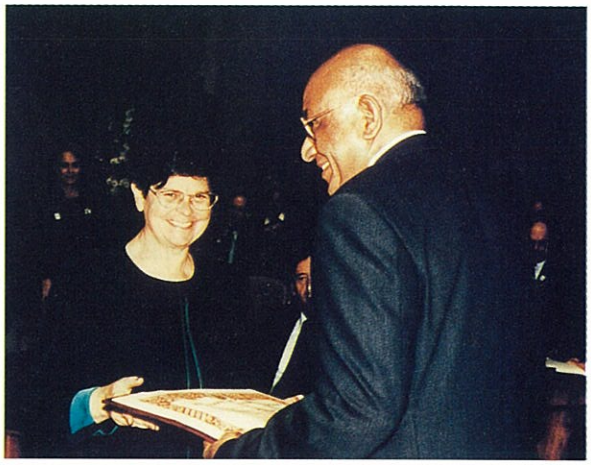


コーネル大学、大学院生の頃（24歳）
A graduate student, aged 24, at Cornell University

北東タイの村にて（中央）
Staying in a village in Northeast Thailand (center)

ハーバード大学で人類学者エドモンド・リーチ氏（左）と並んで座る
Professor Tambiah sitting together with Sir Edmund Leach, an anthropologist (left), at Harvard University

シカゴ大学人文学名誉博士号を取得
Receiving the Honorary Doctorate of Humane Letters at University of Chicago



バルザン賞受賞（1997年、スイスにて）
Receiving the Balzan Prize in Switzerland in 1997

略　歴

1929	スリランカ・ジャフナ市に生まれる
1951	セイロン大学文学士
1951-60	セイロン大学講師
1954	コーネル大学博士（社会学・社会人類学・社会心理学）
1960-63	ユネスコ専門員としてタイ国派遣
1964-72	ケンブリッジ大学講師
1968	ロンドン大学経済学院（LSE）マリノフスキー記念講演
1970-72	ケンブリッジ、キングス・カレッジ　フェロー
1973-76	シカゴ大学人類学科教授
1973	英国王立人類学協会リバーズ記念賞受賞
1976-	ハーバード大学人類学科教授、ハーバード大学ピーボディ考古学・民族学博物館南アジア民族学学芸員
1979	英国学士院ラドクリフ・ブラウン記念講演
1981	米国芸術・科学アカデミー会員
1984	ロチェスター大学、ルイス・ヘンリー・モーガン記念講演
1989-90	米国アジア研究協会会長
1991	シカゴ大学人文学名誉博士
1991	スリランカ、ペラデニヤ大学人文学名誉博士
1991	ロンドン大学ダリル・フォード記念講演
1994	米国科学アカデミー会員
1995-	ハーバード大学人類学エスター・アンド・シドニー・ラブ教授
1997	英国王立人類学協会、ハックスレー記念賞受賞及びハックスレー記念講演
1997	バルザン賞（バルザン賞国際財団）受賞

主な著作

『東北タイにおける仏教と精霊信仰』ケンブリッジ大学出版，1970

『婚資と嫁資』(共著)，ケンブリッジ大学出版，1973

『世界の征服者と放棄者—現代タイにおける仏教と政治及びその歴史的背景』ケンブリッジ大学出版，1976

『森林の仏教聖者たちと護符信仰』ケンブリッジ大学出版，1984

『文化・思考・社会的行為』ハーバード大学出版，1985

『スリランカ：エスニックな同胞殺戮と民主主義の解体』シカゴ大学出版，シカゴ，1986

『呪術・科学・宗教・合理性の限界』ケンブリッジ大学出版，1990

(邦訳『呪術・科学・宗教－人類学における「普遍」と「相対」』思文閣出版，京都，1996)

『裏切られた仏教？—スリランカにおける宗教・政治・暴力』シカゴ大学出版，シカゴ，1992

『平準化する群衆：南アジアにおけるエスノナショナルな紛争と集合的暴力』カリフォルニア大学出版，バークレー，1996

※出版地のないものは、全てケンブリッジにて出版

贈賞理由

スタンレー Ｊ．タンバイア氏のタイ、スリランカにおける、実証的調査に基づきながら独創的な解釈を導き出した人類学的業績は、国際的に極めて高く評価されてきた。さらに、儀礼、呪術、宗教、国家、アイデンティティについての独自の精緻な理論は、人類学を越えて広く人文・社会科学の諸分野に浸透している。

タミル系出自のスリランカ人として、タンバイア氏はセイロン大学で教育を受け、アメリカのコーネル大学で博士号を得た。1960年からタイで国連専門家として調査に従事し、タイ研究者の道を歩み始める。その後、ケンブリッジ大学、シカゴ大学で教鞭をとった後、1976年以来ハーバード大学の人類学科教授として、アメリカのアジア研究、人類学界の指導的立場にある。

『東北タイにおける仏教と精霊信仰』をはじめとするタイに関する三部作の大著は、儀礼論、国家論、カリスマ論などを理論的背景に、詳細な民族誌、歴史人類学の作品としてすでに古典的な位置付けを与えられている。理論的な論考である『文化・思考・社会的行為』『呪術・科学・宗教・合理性の限界』は象徴論、儀礼行為論などに大きなインパクトを与え続けている。1983年のスリランカでの民族紛争の激化を契機に、タイ研究などで中断されていたスリランカ研究を再び始め、紛争、暴力、仏教などに焦点を当てて宗教と政治と社会との関係について積極的に発言している。さらに、南アジアの民族帰属意識、民族抗争、集団的暴力について、比較的視点をふまえながら取り纏めを行っている。

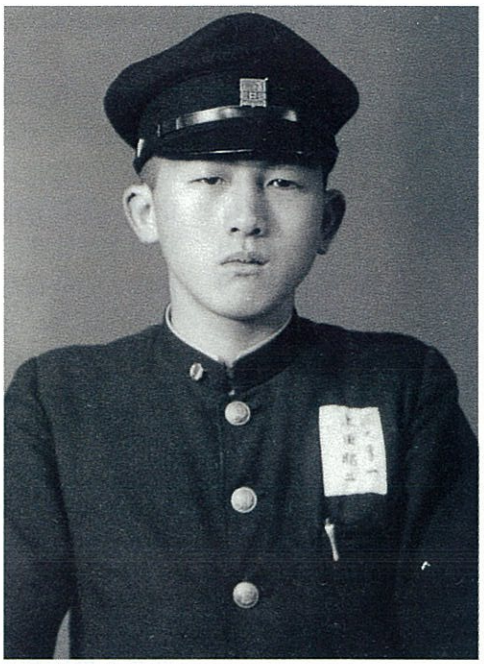
現代人類学において最高の研究者の一人と認められ、数々の栄誉ある記念講演の演者としても指名され、諸大学の名誉博士号を付与されていることからも、その研究業績が広く認知されていることがわかる。特に権威の高い米国科学アカデミーの会員であることは特筆される。1989年には、世界的な活動をする米国アジア研究協会の会長を務めて、アジア研究の推進に貢献している。鋭い道徳的感受性、学問的誠実さ、深い思索に裏打ちされた業績は、社会的にも広く影響を与えている。

このように、学者として、アジア出自の知識人として、宗教と国家の関係や民族紛争など我々の直面する社会の問題、世界全体の問題に真摯に取り組み、卓越した業績を残したタンバイア氏は、「福岡アジア文化賞―学術研究賞・国際部門」の受賞者として真にふさわしいといえる。

学術研究賞・国内部門
ACADEMIC PRIZE ： DOMESTIC

上田（うえだ） 正昭（まさあき）	**UEDA Masaaki**
京都大学名誉教授	**Professor Emeritus of Kyoto University**
1927年4月29日生	**Born April 29, 1927**
日本国	**Japan**

湯川秀樹先生（左）と対談
Professor Ueda talks with Dr. Yukawa Hideki (left)



國學院大学専門部入学の頃
Entering Kokugakuin University

「日本の中の朝鮮文化」創刊の頃。金達寿氏（右）、司馬遼太郎氏（左）と
Around the time Professor Ueda published *Nihon no naka no Chosen Bunka* (Korean Culture in Japan)

NHK教育テレビ「歴史の中の人間」にて司馬遼太郎氏（右）、湯川秀樹氏（中央）と
Appearing on an NHK TV program, "Mankind in History," with Mr. Shiba Ryotaro (right) and Dr. Yukawa Hideki (center)

中国西北大学名誉教授称号授与式にて（左から2人目）
Professor Ueda attending an awarding ceremony to celebrate his appointment as Professor Emeritus of Xibei University, China (second from left)

略　歴

1927	兵庫県城崎町に生まれる
1950	京都大学文学部史学科卒業
1963-71	京都大学教養部助教授
1969	京都大学文学博士
1970	毎日出版文化賞受賞
1971-91	京都大学教養部教授
1976-78	京都大学評議員
1978-79	京都大学教養部長
1983-85	京都大学埋蔵文化財研究センター長
1985	文部大臣社会教育功労者表彰
1991	京都大学名誉教授
1991-97	大阪女子大学学長
1992	日本風俗史学会江馬賞受賞
1994	中国、西北大学名誉教授
1996	アジア史学会会長
	京都市文化功労者表彰
1997	大阪府立中央図書館名誉館長・姫路文学館館長・
	世界人権問題研究センター理事長・大阪女子大学名誉教授
	大阪文化賞受賞
1998	高麗美術館館長

主な著作

『神話の世界』創元社、大阪，1956
『日本古代国家成立史の研究』青木書店，1959
『帰化人』中央公論社，1965
『日本古代国家論究』塙書房，1968
『日本神話』岩波書店，1970
『古代文化の探求』講談社，1977
『古代の日本と朝鮮』(岩波グラフィックス)岩波書店，1986
『古代の道教と朝鮮文化』人文書院，1989
『古代伝承史の研究』塙書房，1991
『日本の神話を考える』小学館，1991
『吉野ヶ里・藤ノ木と古代東アジア－日・中・韓 国際シンポジウム』(共著)
小学館，1991
『古代の日本と東アジア』(編著)，小学館，1991
『謎の5世紀を探る－「シンポジウム」東アジアの再発見』(共著)，読売新聞社，
1992
『歴史家の眼』小学館，1995
『朝鮮通信使－善隣と友好のみのり』(編著)，明石書店，1995
『アジア山民海民の民俗芸能』(共著)，雄山閣出版，1995
『神道と東アジアの世界』徳間書店，1996
『東アジアと海上の道』明石書店，1997
『古代の日本と渡来の文化』(編著)，学生社，1997
『論究・古代史と東アジア』岩波書店，1998
『上田正昭著作集』(全８巻)，角川書店，1998～
※ 出版地のないものは、全て東京で出版
(ほか単著33冊、監修・共編著325冊)

贈賞理由

上田正昭氏は、日本古代史を東アジア世界の歴史の動向と連動させて解明した、日本を代表する数少ない歴史学者の一人である。同氏は、日本古代の歴史と文化を幅広い視野で多面的に研究し、また、アジアの中の日本という新たな歴史像を構築するなど、国際的にも高い評価を得ている。

上田氏は、いち早く学生時代に折口信夫氏や三品彰英氏に師事して日本の古代文化の研究に目覚めた。それ以来、一貫して日本古代史の研究に携わってきたが、同氏の学問に対する基本的な態度は、徹底した文献史料批判に基づく実証主義である。その一方で、国文学・神話学・民俗学・宗教史学・考古学など、多方面にわたる深奥な学識を駆使して、古代日本の史脈を学際的に解明し、独自の学風を形成してきた。

上田氏の研究は、1960年代に入り、日本における古代国家の形成過程を東アジアの視角で解明するという新たな展開を見せた。例えば、同氏の著作『日本の神話を考える』で見られるように、中国大陸や朝鮮半島の神話との比較や歴史学・民俗学・考古学との学際的研究を通じて日本神話を追求するなど、中国や朝鮮からの渡来文化の影響や実態、あるいは、アジア・太平洋につながる海上の道の重要性に注目し、数多くの研究業績を上げた。さらに、アジアの中の日本という新しい地域史の構築を目指している。

その間、東アジア古代史に関する国内外での国際学術シンポジウムに、たびたび出席するなど、学術交流の進展に大きく貢献してきた。このような学問研究の姿勢から、アジア諸地域の文献史学と考古学の専門学者による結集を推進することになった。この分野では初めての国際学会であるアジア史学会の設立にあたっては中心となって奔走し、1990年に創設した。1996年の第6回北京大会において会長に就任したが、その前後を通して、東アジアにおける研究者の連帯によって、相互の歴史認識を深め、さらなる歴史研究の展開に向けて尽力している。

一方、現在では高麗美術館や姫路文学館の館長、ならびに、世界人権問題研究センター理事長などの要職を兼務しながら、学界のみならず社会的諸活動の面でも大きな影響力をもっている。

このような上田正昭氏の、東アジアの中の日本古代史の解明はもとより、東アジアの学術交流や現代日本の社会連携に果たした功績は顕著であり、まさしく「福岡アジア文化賞－学術研究賞・国内部門」にふさわしいものといえる。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

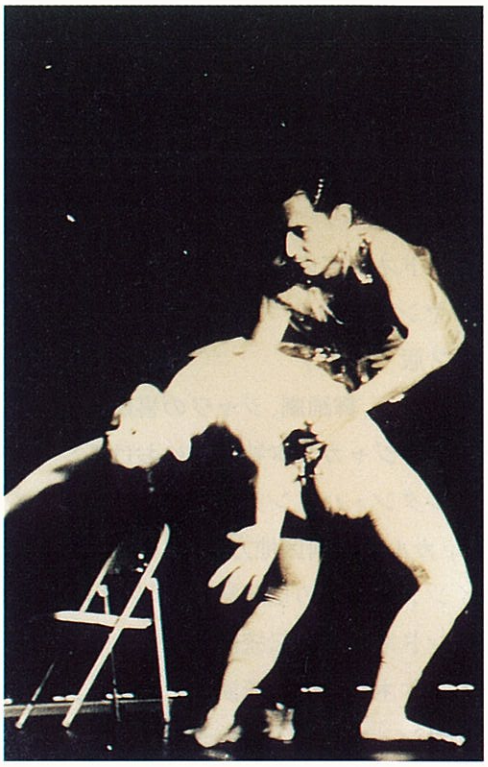
R. M. スダルソノ	**R. M. Soedarsono**
ガジャ・マダ大学教授	**Professor of Gadjah Mada Univeristy**
前インドネシア国立芸術大学 ジョクジャカルタ校学長	**Former Rector of Indonesia Institute of the Arts Yogyakarta**
1933年4月5日生	**Born April 5, 1933**
インドネシア共和国	**The Republic of Indonesia**

インドネシア文化ミッションとしてオーストラリア公演（前列中央）
Tourign Australia as artistic director of the Indonesian Cultural Mission (center), front row

「マハーバーラタ」の英雄アルジュノ役を踊る
Professor Soedarsono dancing Arjuna, the refined hero of the 'Mahabharata'

オランダのジャワ文化研究第一人者ピジョー博士（右）と
With visiting Dr. Th. Pigeaud, a great Dutch scholar in Javanese culture (right)

スダルソノ一家
Professor Soedarsono with his family



ハワイ大学・ケネディ劇場で踊る
Dancing a duet at Kennedy Theatre, University of Hawaii

略　歴

1933	ジョクジャカルタに生まれる
1962	ガジャ・マダ大学文化史修士
1962-	ガジャ・マダ大学芸術文化史教授
1963-80	国立舞踊専門学校ジョクジャカルタ校(現インドネシア国立芸術大学ジョクジャカルタ校の前身）校長
1967	フランス政府より表彰
1974	ハワイ大学舞踊専門客員準教授
1977	ミシガン大学舞踊専門客員教授
1980-83	フォード財団より表彰
1983	ミシガン大学博士（東南アジア研究、パフォーミング・アーツ）
1988-	ガジャ・マダ大学学部長（パフォーミング・アーツ研究修士課程）
1992	観光通信省よりアディカルヤ賞受賞
1992-97	インドネシア国立芸術大学ジョクジャカルタ校学長
1994-	教育文化省芸術協会会長
1995	国際交流基金文化人短期招聘
1996	ディディッ・ニニ・トウォ舞踊協会より金賞受賞
1997	ジャワ文化協会より文化賞受賞
1997	インドネシア芸術単科大学デンパサール校よりシヴァ･ナタラジャ賞受賞

主な著作等

『ラーマ、インドネシア演劇における理想的英雄及び善の表現』(インドーアジア芸術・文化研究第３巻)ボンベイ，1973

『インドネシアの舞踊』グヌン・アグン社，ジャカルタ，1974

『インドネシアにおける生きた伝統的演劇』ガジャ・マダ大学出版会，1974

『ジャワとバリ：インドネシアにおける舞踊演劇の２つの中心地』ガジャ・マダ大学出版会，1974

『インドネシアの舞踊』教育文化省出版，ジャカルタ，1977

『ワヤン・ウォン：ジョクジャカルタ王宮における儀礼的舞踊劇』ガジャ・マダ大学出版会，1984(第２版　1990)

『ガムラン､舞踊劇､ジャワの喜劇』（共著），教育文化省出版，1984

『ジョクジャカルタ特別区におけるジャワの伝統的上演芸術と観光』教育文化省出版，1989

『スルタン・ハメンク・ブウォノ９世：ジャワ舞踊ジョクジャカルタ様式の発展かつ改革の士』ジョクジャカルタ特別区地方局，1990

『インドネシアの伝統舞踊』（共著）ハラパン・キタ財団，ジャカルタ，1996

『インドネシアの伝統的人形劇』（共著），ハラパン・キタ財団，ジャカルタ，1996

『インドネシアの伝統演劇』（共著），ハラパン・キタ財団，ジャカルタ，1996

『ワヤン・ウォン：ジョクジャカルタ王宮における儀礼的舞踊劇』ガジャ･マダ大学出版会，1997

『世界時代におけるインドネシアの上演芸術』高等教育理事会出版，ジャカルタ，近日刊行

※出版地のないものは、全てジョクジャカルタにて出版

贈賞理由

R.M.スダルソノ氏は、インドネシアを代表する舞踊家であるとともに、欧米における学問的視点に基づくアジア芸術研究の新たな時代を切り拓いた研究者である。

スダルソノ氏は、1933年にインドネシア・中部ジャワ州の古都ジョクジャカルタに生まれ、幼少の頃から舞踊の研鑽を積んだ。ジョクジャカルタ様式の舞踊の正統的継承者として、インドネシア国内はもとより、1958年以来、海外でも活躍している。

ジョクジャカルタのガジャ・マダ大学で文化史専攻の修士号を得たのち、1963年から1980年まで、国立舞踊専門学校ジョクジャカルタ校の校長を務めた。その間、1967年にはパリで講演を行い、1968年にはロックフェラー財団からの助成によりハワイ大学でモダン・ダンスとバレエを学ぶなど、欧米でも多くの研鑽を積んだ。1969年に米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校に客員芸術家として招聘され、舞踊劇『ラーマーヤナ物語』の創作を行い、高い評価を受けた。また、1970年にはジャワ古代王朝を題材とした舞踊劇『ガジャ・マダ』を創作し、これを皮切りに多くの舞踊劇の創作を手がけた。彼の創作した舞踊劇は、語りや台詞を用いる従来のジャワ舞踊劇とは異なり、西洋のバレエ作品の形式をもとに考案された音楽舞踊劇の新たな形式であり、ジャワ舞踊を斬新な形式で世に送り出した功績は高く評価されてきた。

スダルソノ氏の芸術研究者としての成果は、1983年に博士論文『ワヤン・ウォン：ジョクジャカルタ王宮における儀礼的舞踊劇』として発表され、1984年にはガジャ・マダ大学出版会から出版された。この研究は、中部ジャワ・ジョクジャカルタ様式の舞踊劇に関する、歴史学・芸術学・文学の各分野にまたがる本格的な研究成果であり、舞踊劇を含むその後のジャワ芸術研究の分野に世界的に大きな学問的貢献をもたらした。

その後スダルソノ氏は、インドネシア芸術文化研究プロジェクト長、インドネシア国立芸術大学ジョクジャカルタ校副学長、教育文化省芸術協会会長、ガジャ・マダ大学芸術文化史教授を歴任し、1992年から1997年までインドネシア国立芸術大学ジョクジャカルタ校学長に就任した。また1993年以来、アジア・太平洋各国の音楽学者たちが設立した「アジア・太平洋民族音楽学会」のインドネシア代表理事として、国際的な学会活動にも参加している。

このように、スダルソノ氏の活動は、インドネシア国内外における舞踊創作活動などの精力的な芸術実践活動から教育・研究活動まで非常に多岐にわたり、特に世界的な場における多彩な活動は、芸術・文化を通じた国際交流として重要な功績であり、まさしく「福岡アジア文化賞―芸術・文化賞」にふさわしい業績といえる。

公式行事スケジュール

行　事	日　時	場　所
○授　賞　式	9月25日(金) 午後2時30分～4時	アクロス福岡シンフォニーホール
○記　者　会　見	9月25日(金) 午後4時～5時	アクロス福岡6階606会議室
○祝　賀　会	9月25日(金) 午後6時30分～8時	ホテル日航福岡３階 「都久志の間」
○受賞者フォーラム 「それぞれの人生を語る」	9月26日(土) 午後5時～7時	イムズホール(イムズビル9階)
○ガムラン音楽公演 「七色の音の彩 ーガムラン・ガドゥン」	9月26日(土) ①午後0時～0時45分 ②午後2時30分～3時15分 ③午後6時～6時30分	エルガーラ・パサージュ広場
○市民フォーラム		
・古代史セミナー 「黒塚・キトラ古墳と東アジア」	9月26日(土) 午後1時～4時	福岡市役所15階講堂
・現代アジア研究セミナー 「南アジア、東南アジアにおける宗教・国家・社会」	9月27日(日) 午後1時～3時30分	福岡市役所15階講堂
・韓国文化セミナー 「韓国語－その歴史と広がり」	9月27日(日) 午後3時30分～6時	イムズホール(イムズビル9階)
・インドネシア宮廷舞踊公演 「ジャワ・ガムランと舞踊の精華」	9月28日(月) ①午後2時30分～4時 ②午後6時～7時30分	エルガーラ大ホール(エルガーラ8階)

授　賞　式

日　時：9月25日（金）午後２時30分～４時
場　所：アクロス福岡シンフォニーホール

1998年(第９回)福岡アジア文化賞授賞式は、在日アジア各国大使御夫妻をはじめ、留学生、学術・教育・芸術・文化関係者及び市民などを含め、約1,000名の参加を得て、九州交響楽団による演奏の中、厳かにスタートした。

ステージでは、今回の受賞者のプロフィールや受賞にいたったこれまでの研究・芸術活動の一端をスライドで紹介し、その業績を讃えた。主催者挨拶、来賓による祝辞、選考経過報告と続き、主催者により賞の贈呈が行われた。4名の受賞者は受賞後のスピーチで喜びを表し、福岡市民や福岡アジア文化賞に対するメッセージなどを語った。

特別公演として、芸術・文化賞を受賞されたR.M.スダルソノ氏の同行公演団により、インドネシア宮廷舞踊「スリンピ・パンデロリ」が披露され、式典に華やかさを添えた。

授賞式フィナーレ
Finale of the Prize Presentation Ceremony

受賞者挨拶

李　基　文

この賞は私には過分の大きな賞だと思います。

この場に出てくる資格のない私がこの様に出てまいりますと、恥ずかしいことこの上ございません。しかし、私を推挙してくださいました方々の御好意を無下にできず、この場に参席をさせていただきました。

私はこの賞を、いくらも残っていない私の人生におきまして、さらに学問に精進せよとの激励と思いいただくことにいたしました。心より感謝申し上げます。私は、韓国語の古い歴史を明らかにする仕事に心をこめてまいりました。この過程において韓国語を取り巻く諸言語についても関心を傾けてまいりました。

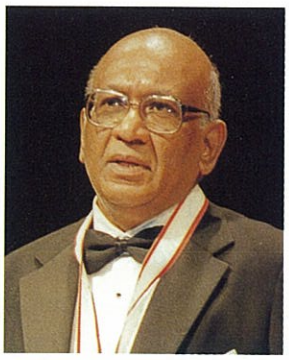
元来、不精者でたいした才能もなく生まれた私に、この研究はあまりにも手に余る仕事でした。私がこの研究で何か少しでも成し得たことがあったとすれば、それは全てが先学と同学の皆様からいただいた良き教えのおかげと思っております。特に、私は若い時分から韓国の内と外で誠に素晴らしい師にお会いでき、教えをいただくことができました。私は、多くの恩師に賜りました御恩に少しでも報いなくてはならないと常に思いながらも、私の能力不足のためそれが未だできておりません。

私がみるところでは、東アジアの諸言語に関する研究には未だ解決がされていない問題や開拓されなくてはならない分野が多くあります。

昔にさかのぼるほど解決を待つ問題が多くあります。言語は、全ての文化の基礎です。よって東アジアの諸民族の文化、特にそれらの上古文化は言語の研究なしには解明ができないと私は信じております。今後、有能な学者がでてきて、この研究に大きな発展をもたらすことを期待して止みません。

今年で9回を迎えます福岡アジア文化賞は、アジア文化の研究と発展に大きく寄与してこられました。この賞が今後ますます栄光に包まれんことを衷心より祈念いたします。

この間御労苦を重ねてこられました福岡アジア文化賞の関係者の皆様並びに本日御臨席の皆様に心より感謝申し上げます。



スタンレー J. タンバイア

まず最初に第9回1998年福岡アジア文化賞の学術研究賞・国際部門を授与していただきました福岡市長、福岡市民、福岡アジア文化賞委員会及びよかトピア記念国際財団の皆様に感謝申し上げます。

この賞は、相互理解と平和に貢献するという崇高な目標のもとで、過去10年近くにわたって、近隣のアジア諸国と文化や芸術、学術など様々な分野での交流を深めていることで名高い都市の市民と地方行政の主催であるという点において大変価値あるものだと考えます。もちろん福岡市と九州には近隣諸国と長きにわたる交流の歴史があることは存じております。南アジアで生まれ、南アジア及び東南アジアの学術に対して学術的関心を持ち、東西を広く旅し、現在はアメリカ合衆国に落ちつく身となりました私は、自らが非常に価値あると思うものを象徴する賞をいただくことになりました。

近年、世界のあちらこちら、特に旧ソビエト連邦、東欧や南アジア及び東南アジア、アフリカや中東等で多発しております、未曾有の紛争、しばしばその本質が民族的であり民族主義的であると言われておりますものを生み出している状況に強い関心を抱いております。特に1983年以来、私は、南アジア及び東南アジアにおきまして、民族主義運動の高まりを見せております植民地支配後の国々が直面している課題や、多民族社会における多数派と少数派の間の緊張によってもたらされる問題、そして、権力と資源の獲得手段となる参加型民主制という対抗勢力により悪化した緊張などを描写し解釈するようになりました。政治的力を獲得するために暴力に訴えることが、多くの国々であまりにも蔓延し、組織化されてしまったため、社会科学者がこの問題に取り組むことが必至の状況となっております。

それ故、今日大きな問題となっておりますのは、いかにアジアの多民族多元文化社会の政治的発展と経済的繁栄を確保するか、そして富と権力を分かち合い、平和的な紛争解決と寛容ある共存のために、いかにして、連携した政治の形を作っていくのかということであります。本日私に授与されましたこの賞は福岡市の国際派としてのビジョンを具体化するものであり、これらの目標を実現していく力を私に与えてくれるものであると信じております。

上田　正昭

このたびはからずも「福岡アジア文化賞」を受賞する光栄を、感銘深く感謝しております。御推薦いただきました先生方、関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

福岡は日本列島の表玄関として、古くから海外とりわけアジアとの関係の歴史と文化の要地として発展してまいりました。伝統ある「福岡アジア文化賞」は福岡の過去と現在、そして未来を象徴する賞とうけとめています。

私が日本の歴史と文化を研究する場合に、アジアとりわけ東アジアとのかかわりを抜きにしては、充分な成果をあげることができないと痛感するようになりましたのは、1960年のころからです。そして日本の古代史がアジアの世界と連動して展開してまいりました史実を、海上の道を媒体とする渡来集団と渡来文化とのつながりの中で究明することに努めてきました。

政治や経済・社会との史脈ばかりではありません。仏教はもとよりのこと、儒教・道教そして芸能の分野にも大きな意味と役割を保有していました。神話のなかみにも、アジア・太平洋の神話と類似する要素のあることを見いだすことができます。

紫式部は『源氏物語』（乙女の巻）で、「才(さえ)を本(もと)としてこそ、大和魂の世に用ひらるる方(かた)も、強ふ侍(はべ)らめ」と述べていますが、日本の文化は渡来の文化を受容し、これをベースとして日本独自の文化を構築してきました。それは和魂漢才、和魂洋才といわれる文化のありようにも反映されています。グローバルな比較の視座から、日本の歴史と文化の普遍性と独自性を認識してゆく必要があります。

日本列島における文字の使用が、いったいいつごろから始まるのか。そこにはなお検討すべき多くの課題がありますが、文字の受容の問題一つを取り上げても、北九州がその先進地域であったことは確かです。漢字の文化をベースにして、日本独自の仮名文字を作り出してゆくプロセスにも、日本文化の発展のプロセスが浮かび上がってきます。

「福岡アジア文化賞」の受賞を契機として、今後さらにアジアの学術交流と善隣友好に寄与しうる、おのが学問の集成に努力してまいりたいと存じます。福岡がアジアへの日本文化の発信基地としてますます前進することを期待します。

R.M.スダルソノ

本日福岡市におきまして、栄えある福岡アジア文化賞を賜りますことは私にとりまして大変名誉なことでございます。私の人生におけるこの一大イベントは、これまでの個人的な忘れがたい経験を思い起こさせてくれました。

50年前、私がまだ15歳でありましたときに、祖父からいつも、将来は才能ある舞踊家になるよりも立派な研究者になってほしいと言われたものです。1957年には大変辛い経験をいたしました。この年私は、1か月に渡るインドネシア文化ミッションのヨーロッパ遠征舞踊メンバーに選ばれたのですが、祖父はこのことを新聞で知り、私がミッションに参加するジャワの舞踊家のひとりであることに大変な怒りを覚えたのです。このとき私は、祖父の忠告が自分にとって最善であると悟りました。ですから、文化ミッションの出発7日前にミッションへの参加を辞退し、将来もっと外国に行くチャンスがほかに与えられるだろうと自分に言い聞かせたのです。

1963年に私は国立舞踊専門学校ジョクジャカルタ校校長に任命されました。この年以来、パフォーミング・アーツに対する私の興味はますます深くなっていきました。その後ロックフェラー財団からいただきました奨学金で、ハワイ大学(1968年)及びカリフォルニア大学ロサンゼルス校(1969年)にてダンスと民族音楽学を学ぶ機会に恵まれましたが、1980年代の初めになって、やっとミシガン大学で、パフォーミング・アーツをテーマとした東南アジア研究の博士号を取得することができました。

1984年から1992年まで、インドネシア国立芸術大学ジョクジャカルタ校学術部門の副学長を務め、1992年には同校の学長に就任いたしました。1997年に引退するまでこの職を勤めましたが、我が国にはパフォーミング・アーツの専門家が少ないため、退職を5年間延期し、ガジャ・マダ大学のパフォーミング・アーツ研究修士課程の学部長を続けることになりました。インドネシア国立芸術大学ジョクジャカルタ校の学長というハードな職を辞すと同時に、名誉ある福岡アジア文化賞の受賞者4名の一人に選ばれましたことは、大変な驚きであります。妻と私はこの豪華で思い出に残る歓迎をしてくださいました福岡市長と文化賞委員会の皆様に厚く御礼申し上げたいと思います。私はこの福岡アジア文化賞がアジア諸国における交流と相互理解に大きく貢献していると信じております。

受賞者フォーラム

日　時：９月26日（土）　午後５時～７時
場　所：イムズホール（イムズビル９階）
参加者：約300名

１　テーマ　「それぞれの人生を語る」
２　出演者
大賞受賞者　李　基　文
学術研究賞・国際部門受賞者　スタンレーＪ．タンバイア
学術研究賞・国内部門受賞者　上田　正昭
芸術文化賞受賞者　Ｒ．Ｍ．スダルソノ
コーディネーター：上智大学アジア文化研究所客員教授　小倉　貞男

３　概　要

「受賞者フォーラム」は全受賞者が一堂に会しそれぞれの人生を語り合うフォーラムで、福岡アジア文化賞はじまって以来、今回初めての企画である。各受賞者は、自分の生い立ち、なぜ今の道を選んだのか、そしてアジアとは何かなど、今までの人生を振り返り、生の声で熱心に語り合った。

会場は、中央に円卓、参加者席がそれを取り囲み、劇場のような雰囲気を漂わせていた。軽やかな音楽とともに、高校生をはじめ多くの市民で埋まった客席を縫うように一人ずつ受賞者が入場し、フォーラムが始まった。まず、生い立ちと人生の転機について、受賞者はそれぞれ次のように語った。

タンバイア氏は、スリランカのタミル人の家庭に生まれ、11歳のときに家を離れてエリート校に入る。そこでの宗教、民族などが異なる少年たちとの出会いは、氏の人生に大きな意味を持つ。戦争で学校は閉鎖されるが、農場へ送られ、幸い戦争にあまり影響されない生活をすることができた。戦後大学へ進学した年にスリランカは独立という転機の年を迎える。国の独立は、エリートとしての氏にとっても自らのあり方を問うものとなり、当時のアメリカ人の教授との出会いが農村社会へ目を向けるきっかけとなった。1960年代民族問題などで、スリランカの大学での研究が困難となったことを契機に移ったタイでの研究業績が認められ、次第に世界的に評価されるようになった。

上田正昭氏は、兵庫県に生まれ、京都西陣で育った。中学2年のときに親戚筋の京都亀岡の神社の後継者となる。中学時代外交官になりたいと思っていた氏は、その当時発禁図書とされていた歴史学者津田左右吉氏の著書を読んで開眼し、歴史学を志すこととなる。戦争中の教育に半信半疑だった氏は、次第に天皇とは何かを考えるようになった。敗戦によるショックで故郷に帰ろうとしたが、天皇制への学問的興味を捨て難く、京都大学に進み、古代国家の研究を始める。1960年代から東アジアとの関わりを説いてきた氏は、当時その説を語ることは大変だったと振り返る。古代の文献は民衆ではなく支配者が書いたものであるとし、研究に考古学の成果を利用する氏の姿勢にもふれた。

スダルソノ氏は、ジョクジャカルタで生まれる。祖父により舞踊の素質を認められ、12歳から毎日1時間の舞踊の特訓を受ける。16歳のとき舞踊劇の大役に抜擢され、それ以後、政府要人訪問時に催される舞踊劇の大役を演じることとなり、翌1950年、氏のジャワ舞踊家としてのキャリアが始まることとなる。国立舞踊学校の校長となった1963年は、踊りの勉強に全神経を注ぐ生活が始まり、世界的な活動のきっかけとなったという意味で、非常に大切な年であった。自分のジャワ人としてのアイデンティティは、ジャワ舞踊を学ぶことで強めることができたと氏は語る。

李基文氏は、平安北道の自然豊かな農村で生まれる。幼少から本に魅せられ、むさぼるように読んだという。特に故郷の大先輩で、韓国を代表する金素月氏の詩に深い感銘を受ける。日本が植民地の人に民族的伝統を捨てるように強制したことはつらかったと氏は静かな口調で語る。父からは「歴史と言語を守れば民族は滅びない」と聞いて育った。日本占領下、家にあった韓国語の夥しい蔵書は地下に隠され、学校での日本語生活と、家で韓国語の蔵書を読む二重生活を送ったが、その当時氏が身につけた韓国の言語、歴史などの知識は、同世代とは比ぶべくもないほどのものだった。兄が歴史学を、氏が言語学を専攻したのは決して偶然ではなく、父の教えの影響が大きかったと氏は振り返る。

次にアジアについてのそれぞれの意見が交わされた。李氏は、中国の文化や漢字を受け入れながらも独自の文化と言語を守った韓国の歴史にふれ、東アジアに押し寄せるヨーロッパ文化に対応し、いかに自国の文化伝統を守り、発展させていくかということが課題と説く。そして、今、日本がその範を示す立場にあり、きっと期待に応えてくれるだろうと述べた。タンバイア氏は、アジアをはじめ世界が国家の枠とは異なった地域主義や多様性を求めて動いてきている点をプラスの評価として指摘する一方で、その地域主義や多様性の許容範囲をどこに設けるか、政治の一つの枠組みにどのようにそれを組み込んでいくのかという問題に言及し、地域社会が多文化主義、複合社会を認めどのように独自の存在を進化させられるかが課題だと述べた。スダルソノ氏は、タンバイア氏に賛意を表し、インドネシアの民族、言語の多様さを紹介するとともに多文化主義、複合社会であるがゆえのインドネシアの問題点を示しながら、インドネシア語という共通言語の重要性を強調した。上田氏は、「中央」に対する「地方」という言葉は嫌いで、「地域」という言葉を使うようにしていると述べる一方で、地域性だけを強調しても共存が不可能である点を指摘し、地域(ローカル)であってなおかつ国際的な広い視野(グローバル)が必要だという、持論の「グローカル」という考えを披露した。

会場から寄せられた、中村学園三陽高校の生徒の「高校時代に何をなすべきか」という質問に対し、スダルソノ氏は、大事なことは自分で考え自分で選ぶということであると答え、上田氏は、自信や勇気を持つことであり、これには訓練が必要である、しかもそれは誰かから与えられるものではない、と。また、タンバイア氏は一緒に行動できる仲間をつくり、自分を発見するために多くの外の世界と触れることだとし、李氏は、自分で考える力を養い、自分で探す努力をすることだと助言した。

最後に、「先生方はそれぞれ戦後の混乱の中で自分を見失うことなく志を培ってこられた。それを発展させようと努力されましたが、その中に『創造』があったのではないか。異文化の接触は難しいが、国際社会の中における共生を目指し、努力して平和を構築することは『創造力』が最も大事ではないか」と、コーディネーターの小倉氏がまとめた。

古代史セミナー

日　時：９月26日（土）午後１時～４時
場　所：福岡市役所15階講堂
参加者：約400名

１　テーマ　　「黒塚・キトラ古墳と東アジア」
２　プログラム

基調講演	福岡アジア文化賞　学術研究賞・国内部門受賞者		上田　正昭
現地報告	「黒塚古墳」	奈良県立橿原考古学研究所主任研究員	宮原　晋一
	「キトラ古墳」	京都橘女子大学文学部教授	猪熊　兼勝
パネルディスカッション			
	パネリスト		上田　正昭／猪熊　兼勝／宮原　晋一
	コーディネーター	九州大学文学部教授	西谷　　正

３　概　要

邪馬台国論争に一石を投じた黒塚古墳などの大発見を、上田氏がどうとらえるのか。研究者や考古学・古代史ファンで満席となった会場には熱気が感じられた。

基調講演で上田氏は、朝鮮半島や中国、東南アジアからの渡来文化が古代日本で果たした役割の重要性を、1965年に氏が著した『帰化人』という書を例にひきながら説明するとともに、その後の発掘調査により次々と実証されてきた東アジアと古代日本とのつながりの密接さについて、熱っぽく語った。また、高松塚古墳発掘当時の感動やその発掘の意義、キトラ古墳の天文図の素晴らしさ、黒塚古墳の発掘の影響などを具体的な例を示しながらわかりやすく説明した。そして、いずれの発掘も東アジア史観の正当性を裏付けたとし、中央を起点とした中央史観に対し、地域に目を向けた地域史観、氏の表現による「ローカルであってかつグローバル」な「グローカル史観」の必要性を訴えた。

現地報告では、宮原氏が黒塚古墳に見られる葬送儀式を、猪熊氏がキトラ古墳の天文図の意味をそれぞれスライドで解説。パネルディスカッションに移ると、畿内説と九州説に二分する邪馬台国論争に、猪熊氏は「この論争は永遠に解けない知的ゲーム」、上田氏は「邪馬台国は女王卑弥呼の後にも国は続いた。卑弥呼だけで論議すべきでない」とし、「２つの古墳は考古学を日本列島の内側だけで論じるべきではないことを如実に示すもの」と語った。西谷氏は「まず九州を経由して黒塚、キトラ古墳へとつながっていった」と、玄関口であった九州の重要性を指摘してセミナーの結びとした。

上田正昭氏
Professor Ueda Masaaki

宮原晋一氏
Mr. Miyahara Shinichi

猪熊兼勝氏
Professor Inokuma Kanekatsu

西谷正氏
Professor Nishitani Tadashi

現代アジア研究セミナー

日　時：９月27日（日）午後１時～３時30分
場　所：福岡市役所15階講堂
参加者：約200名

１　テーマ　　「南アジア、東南アジアにおける宗教・国家・社会」
２　プログラム
基調講演　福岡アジア文化賞　学術研究賞・国際部門受賞者　　スタンレー J. タンバイア
パネルディスカッション
パネリスト　　スタンレー J. タンバイア
神田外語大学学長　　石井　米雄
コーディネーター　京都大学東南アジア研究センター所長　　立本　成文
３　概　要

タンバイア氏は基調講演において、国民国家の形成について語り、なかでも20世紀終盤に至って世界各地で台頭している少数民族の自立運動に重点を置いて話した。また、労働者や移民、農民の入植によって多様な文化が遭遇し、この多文化状況から生み出される弊害と平和的共存について語った。多くの文化が共存するなかでの摩擦解消と平和共存に向けて考えるべきであると主張する氏は、「他の文化と交流することで自分の文化を豊かにすることができる。人と人の違いを考えることが寛容につながる」と、締めくくった。

パネルディスカッションでは、石井氏が、日本人の他文化受容は文化の担い手である人間ではなくモノや書物を媒介としてきたと指摘し、そうした日本人にとってタンバイア氏の講演は、海外からやってくる多様な「隣人」たちに何をなすべきかを21世紀に向けて示すものである、と述べた。また、会場から多くの質問が寄せられたが、「多文化主義は本当に可能なのか」という問いにタンバイア氏は「個々の意志疎通を図っていくことが必要。寛容な姿勢をとることができれば可能だ」と語った。最後に立本氏が、「エスノナショナリズムや国民国家の問題の根底にあるのは、違いを認めない平等と同時に民族のアイデンティティを求めようという＜平等の政治学＞と＜差異の政治学＞である。これはホスト社会として日本も直面していく問題であり、『日本国民であること』と『日本人としての文化的アイデンティティ』に思いをいたすという課題が与えられたのではないか」と結んだ。

スタンレー　J．タンバイア氏
Professor Stanley J. Tambiah

石井米雄氏
Professor Ishii Yoneo

韓国文化セミナー

日　時：９月27日（日）午後３時30分～６時
場　所：イムズホール（イムズビル９階）
参加者：約350名

１　テーマ　　「韓国語－その歴史と広がり」
２　プログラム

基調講演	福岡アジア文化賞大賞受賞者	李　基　文
関連講演	富山大学人文学部教授	藤本　幸夫
	麗澤大学大学院言語教育研究科長	梅田　博之

パネルディスカッション

パネリスト		李　基　文／梅田　博之／藤本　幸夫
コーディネーター	龍谷大学経済学部教授	田尻　英三

３　概　要

李氏は、基調講演において、15世紀ハングル成立以前の韓国語の歴史的研究について語った。同時代以前の文献資料が絶対的に不足した中での研究には大きな苦労を強いられてきたことを述べ、最初に、14世紀高麗時代の漢文訓読資料にもとづいて漢字による韓国語の表記法について説明したのち、これより時代を遡った新羅時代の漢文訓読の存在と、日本における奈良時代の漢文訓読法の朝鮮半島からの伝来を示唆した。次に、『三国史記』の地理志に記された地名の解読方法、高句麗、新羅、百済の古代三国の言語の特徴について述べ、さらに高句麗語とアルタイ諸語、古代日本語とのつながり、特に日本語との特別なつながりについて論じた。最後に、李氏は古代や中世の韓民族が漢文訓読や漢字の音訓を利用して自国語を表記するシステムを創り出すという創造的な発想がハングル創制の根底にあると説き、先人が自国語を維持し、発展させてきたことは素晴しいことであると評価して結んだ。

李氏の講演を受け、藤本氏と梅田氏が関連講演を行った。藤本氏は、日本における漢文の訓読の由来について、奈良時代の資料、史実をもとに朝鮮半島からの伝来を検証した。次に梅田氏が、「ハングル」について説明を行い、世界に類例のない優れた文字であると評した。さらに、日本と韓国の長い歴史の間にはお互いの言語を学ぼうとする努力があったことを指摘した。

パネルディスカッションは、会場からの質問を取り上げながら行われた。多くの質問が寄せられ、李氏の研究や韓国語への関心の高さが伺えた。最後に、田尻氏が、パネリスト共通の願いとして、韓国に最も近い福岡の人々に、韓国をもっと知る第一歩として韓国語を学ぶ気持ちをもってほしいと結び終了した。

李基文氏
Professor Lee Ki-Moon

藤本幸夫氏
Professor Fujimoto Yukio

梅田博之氏
Professor Umeda Hiroyuki

田尻英三氏
Professor Tajiri Eizo

インドネシア宮廷舞踊公演

日　時：９月28日（月）午後２時30分～４時／午後６時～７時30分
場　所：エルガーラ大ホール
参加者：各600名

１　テーマ　　「ジャワ・ガムランと舞踊の精華」
２　プログラム
ガムランと舞踊の解説・実演
解説：福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者　　R.M.スダルソノ
中部高等学術研究所副所長　　藤井　知昭
実演：楽器演奏者　11人／ 歌手　１人／ 舞踊者　８人

（1）舞踊　スリンピ・パンデロリ
（2）舞踊　クロノ・トペン
（3）演奏　アユン・アユン
（4）舞踊　ジャイポンガン「アドゥ・マニス」
（5）舞踊　グレモ
（6）演奏　パンクル
（7）舞踊　アルジュノ対チャキル
（8）舞踊　ジャラン・ゴヤン

３　概　要

会場は多くの観客で埋まり、ステージではインドネシアの中でも最も大規模な演奏形態をとる中部ジャワ様式によるガムラン演奏に合わせ、様々な舞踊が繰り広げられた。照明がおとされ演奏が始まると、場内の人々は荘厳な宮廷の世界へと導かれていった。

『スリンピ・パンデロリ』は、中部ジャワの宮廷を起源とした舞踊で、演奏にはスダルソノ氏も参加。格調高い調べにあわせて、４人の女性が優雅に舞った。舞踊には、ジャワに古くから伝えられてきた物語が多く反映されている。『アルジュノ対チャキル』は、古代叙事詩「マハーバーラタ」の一場面を描いたもので、戦いの様子を美しい舞で表現していた。大衆文化として発展した舞踊の中で『ジャイポンガン』はインドネシアで広く親しまれ、宮廷様式のしっとりとした曲調とは異なった、明るく軽快なリズムにのって舞われた。その他、仮面舞踊やインドネシアで一般的によく知られている楽曲等が披露された。

公演は当初１回の予定であったが観覧希望が多かったため、昼と夜の２回公演となった。場内は終始、雅な空気に包まれ、観客は華麗な舞と演奏に酔いしれた。

R.M.スダルソノ氏、藤井知昭氏
Professor R. M. Soedarsono and Professor Fujii Tomoaki

舞踊　スリンピ・パンデロリ
Dance-Srimpi Pandhelori